



科学の眼

まなこ

発行: 姫路科学館 (〒671-2222 姫路市青山 1470-15 電話: 079-267-3961)
<http://www.city.himeji.lg.jp/atom/>

生物シリーズ

兵庫県内に生息するワシ・タカの仲間

姫路科学館 専門員 三谷 康則

兵庫県は東中国山地に位置しており多くの鳥類が生息しています。今回は、その中から代表的なワシ・タカの仲間を紹介します。

■イヌワシ

兵庫県には、1960年代にイヌワシが30羽以上も生息していましたが、現在では8羽に激減しました。西日本に生息するイヌワシは生息環境の悪化よりヒナが誕生するのは年間1～2羽で、兵庫県の場合は8年間もヒナが誕生していません。これほど激減したのは餌場が消失したからだと思われます。化石燃料が出現するまでは、里山の木々が燃料として定期的に伐採されてきました。イヌワシは伐採された伐採跡を狩場として利用してきましたが、最近は多くの山が放置されているために、イヌワシの餌場がなくなり個体数が激減したのです。



写真1 枯木にとまるイヌワシ

■クマタカ



写真2 クマタカの飛翔

クマタカは比較的里山近くに生息しており、イヌワシと比べると生息数も多く、人家から2～300m離れた場所で営巣しています。餌の種類も豊富で、ノウサギやヤマドリその他、リスやネズミ、モグラなどの小動物も捕獲しています。これは、イヌワシに比べてクマタカは翼幅が広いために、樹林のなかでも飛ぶことができるためです。そこで、餌の種類も多種多様になり、イヌワシと比較する

と環境の変化にもある程度、対応できるのだと思われます。

■ハヤブサ



写真3 枯木にとまるハヤブサ

播磨地方は昔から採石が盛んに行われていました。しかし、現在、これらの採石場のほとんどが放置されているために、岩場を営巣地とするハヤブサは、採石場跡に営巣することが多くなっています。また、ハヤブサは他のワシ・タカの仲間と違って、比較的、人間を恐れない鳥です。餌を食べている時に30m程離れた場所で見えても、平気で餌を食べ続けます。最近、ハヤブサが増えたのは、営巣する場所が増えたのと、餌であるドバトを容易に捕獲できるためだと思われます。さらに都市のビルのベランダで繁殖するハヤブサも増えています。

播磨地方は昔から採石が盛んに行われていました。しかし、現在、これらの採石場のほとんどが放置されているために、岩場を営巣地とするハヤブサは、採石場跡に営巣することが多くなっています。また、ハヤブサは他のワシ・タカの仲間と違って、比較的、人間を恐れない鳥です。餌を食べている時に30m程離れた場所で見えても、平気で餌を食べ続けます。最近、ハヤブサが増えたのは、営巣する場所が増えたのと、餌であるド

■ミサゴ

ミサゴは魚を餌にする鳥で、昭和30年代には、有害物質で汚染された魚を食べたために、生息数が激減した時期もありました。ミサゴの本来の営巣地は海岸の岩場ですが、釣



写真4 魚を食べるミサゴ

り人が営巣地に接近するために繁殖が難しくなっています。しかし、最近は山間部の送電鉄塔で営巣するミサゴが多くなりました。送電鉄塔の頂上部で営巣するために、遠くからでも巣が確認できますが、巣材が送電線に接触する可能性があるために、電力会社からは嫌われています。しかし、ミサゴは人工物をうまく利用して生息数を増やした鳥ということが出来ます。

り人が営巣地に接近するために繁殖が難しくなっています。しかし、最近は山間部の送電鉄塔で営巣するミサゴが多くなりました。送電鉄塔の頂上部で営巣するために、遠くからでも巣が確認できますが、巣材が送電線に接触する可能性があるために、電力会社からは嫌われています。しかし、ミサゴは人工物をうまく利用して生息数を増やした鳥ということが出来ます。

姫路科学館では3月17日から5月6日まで、第1回 小林平一コレクション展「ワシ・タカの世界」を開催します。日本では今までに29種類のワシ・タカが確認されていますが、そのうち25種類の剥（はく）製を展示します。これだけの多くのワシ・タカ類の剥製を一同に展示するのは、おそらく日本で初めてだろうと思います。

ワシ・タカ類の多くは見るのが難しい鳥で、遠くまで出掛ける必要があります。例えばオオワシやオジロワシは厳寒の時期に、北海道まで行かなければ見られませんが、迫力ある剥製を手軽に見て楽しむことができます。

また、会場には「ハヤブサの四季」の写真コーナーを設けます。兵庫県内に生息するハヤブサを6年間にわたって撮影した貴重な写真が展示されますので、剥製とあわせて是非お楽しみください。

